

四国電友会報

第 3 号
 発 行 人
 山 崎 義 巳
 発 行 所
 松山市二番町
 4の2の10
 電気通信会館内
 電友会四国連合会

目 次

○ 電友会の皆さまへ	今村 徳輔	二
○ 「119」と広域市町村圏	小西 篤夫	二
○ 恩給年金の改定について	編 集 部	三
○ 電友会員の現況調書から	事 務 局	三
○ 連合会強化についての私見	高知 小島 諄	四
○ ヨーロッパを旅して	高松 猪谷 嘉夫	五
○ 随 想	松山 高橋 林二郎	一〇
○ 山頭火雑記		

○ 祖 谷

○ 湯山慕情記

○ 短 歌
 紀の国に遊ぶ

○ 俳 句

○ むくのみ俳句会

○ 眉山の四季

○ 故先山氏を憶う

○ 共済会からのお知らせ

○ 編集後記

徳島 豊崎 二三男 一一

松山 二神 武弘 一二

松山 藤田 基孝 一四

松山 むくのみ句会 一四

徳島 安淵 久青 一五

徳島 太田 集 一五

山 崎 生 一六





電友会の皆さまへ

今村徳輔

世間では「国鉄一家」ということをよくいいますが、「電電一家」とはあまりいってくれません。これにはやくざの「清水一家」というような、自分達の仲間を守るためには、あくどいことでも平気でやるという悪い意味が多分にあると思います、必ずしもそれだけではないようであります。

「電電一家」とは、電電公社に つとめる従業員だけでなく、先輩も関連業者も、さらにその家族をもすべて含め、電信電話事業の発展をこいねがいつつ、ところを一つにして行動する一大集団である といった言い過ぎでしょうか。

毎日読む新聞の中に、公社の記事がのつていれば、どんな些細なことでも、むさぼり読むのが、先輩であり、職員であり、その家族であります。ここには「公社よ しっかりやってくれ」という公社への愛と願いがこめられてるように思います。公社先輩の皆さまが「四国電友会」という会をおも

ちになり、ときには一堂に会し、ときには会報を読むなかで、互いに連絡を密にし、親睦をはかっておられることをおききしておりますが、これは私達現役の者にとりましても大変頼もしいことであります。この会のためには、私達も出来るだけ協力させていただきたいと思っております。

公社は今年、発足以来二十周年をむかえまして、その間、設備数は約十六倍にふえ、世界では米国について第二位となりました。また昔とった「出ん出ん公社」の異名もすっかり返上して、そのサービスは格段に向上しております。

これはけっして私達現役の者の功績ではなく、むしろ諸先輩の残された輝かしい遺産というべきであります。どうぞ今後ともさらにわれわれの御指導、御鞭撻のほど

お願いする次第です。

このように、輝かしい発展をとげて来た公社ですが、現在、経営面や料金面で多事多難な時期にさしかかっております。地域社会における公社の最大の理解者といえ、先輩の皆さまをおいてほかにありません。どうぞ公社の経営やサービスについての真意を地域社会の皆さまに理解していただく「かけ橋」の役割をお願いしたいのであります。まだまだ手のかかる後輩のわれわれですが、昔にかわらず宜しく御支援いただきたいと思っております。そのほかにも、いろいろとお助けいただくことが多いと思いますが、悪しからず御了承下さい。また、暇を見ては、遠慮なく御自身の公社事業所をおとずれて下さい。日常お互いに連絡を密にしつつ、よい意味での「電電一家」をはぐくんでいこうではありませんか。

最後に、先輩の皆さまの御健康と御活躍をお祈りして筆をおかせていただきます。(四国電気通信局長)

「119」と広域市町村圏

小西篤夫

ともかく「119」とダイヤルすれば消防車が間髪をいれずに飛ん

できてくれるものと思っている。それだけに始末が悪いのが火事の場合である。

全国には約3,300の市町村があるが、そのうち「119」を備えているのは半数にも至っていないのが現状である。また「119」があるから安心かと言うと、必ずしもそうはいかない場合がある。

「119」をダイヤルした場合、接続される消防はその電話が収容されている電話局の所在する市町村の消防であって、電話の設置されている市町村の消防ではない。しかも消防はお隣の市町村で起きた火事には特に出動を要請された場合以外、出動しないのがたてまえになっている。行政区域がちがうと火事の連絡を受けた「119」から然るべく連絡してもらい、消防自動車の出動となるが一刻を争うとき、これでは困る。

公社は加入区域と行政区域との一致をはかるため、多額の資金を注ぎ込んできたことはご承知のとおりであるが、地元住民の反対もあり、加入区域が行政区域と合致していないケースがまだ、多数残されている。広域時分制の採用により単位料金へ円で通話できる範囲は拡大され、加入者はどの電話局に収容されていようが平素の

通話には全く関係なく、極めて便利な世の中になるというのに住民の安全と財産を守るためには、加入区域が行政区域に出来るだけ合存するよう努めなければならないこととなる。

しかしながら、幸いなことに、最近「広域市町村圏」というものが自治省の指導により指定されてきており、これにともない数市町村が消防組合を結成、広域消防を組織する動きがある。乏しい市町村の財源で独自の常備消防を持つことは、なかなか難かしいことと思われる。数個の市町村が一緒になれば常備消防を持つことも容易となる。そして「119」も設置され、その市町村では「119」とダイヤルするだけで安心できることとなる。

公社としても行政区域を加入区域に合致させなければといったことを考える必要が全くなくなり、自由に経済的に最も有利な置局計画を進めることができるわけで、まさに一石二鳥である。

四国では全域がそれぞれブロックごとに広域市町村圏として指定されると聞く。どうか一日も早く、その中で広域消防を目ざす消防組合が関係者の協力により結成され、住民の願望に寄与できることを望

んでいる。

(四国電気通信局文書広報課長)

恩給年金の

改定について

編集部

私等の恩給年金の増額については今年昭和四十七年の十月一日から一〇・一%増額ということが、閣議で決定されましたことは、新聞でも掲載されましたのでご存じかと思えます。近く国会で承認、可決ということになるものと信じています。

この恩給年金改定の要望については各県の会長さんからそれぞれの県出身の国会議員さんに、事務所訪問又は文書を以て、又中央では総理府はじめ関係官庁、政府要路の有力者等二百五十八名に陳情活動を推進されたところでございます。今回は公務員の給与上昇率一二%まで引き上げるよう国会の恩給委員会でも熱心に討議され有望な状態にまでこぎつけられたものですが、他に緊急救済は正しなればならないものが出来来まし

たので残念ながら、今年は見送られたそうでございます。

結論として、四十七年十月一日から一〇・一%上昇という結果になったものです。

電友会員の

現況調査から

事務局

昨年右のアンケートの回答を頂きましたものを職員部の松下調査役のもとで、分析、取纏めされたものからとり急ぎ抜粋してみました。

一、アンケートの回収状況

愛媛は二一七通発送し一二八通回答があつて八三・九%

香川は一四四通の発送に一三四通と九三・一%

徳島は九三通に八五通の回答で九一・四%

高知は一一二通に対し九八通で八五・七%。と四国全体では八八・二%という数字を示し、香川の回答数が一番多かったのでございます。

二、住居の状況

回答のあつた四九九人のうち、四一〇人(八二%)は市部に住居を持たれ、八九人(一八%)が郡部に住んでおられます。なお市部居住の四一〇人のうち約七〇%(全体の五七%)の二八五人は県庁所在地に住んでおられます。

三、健康の状況

達者でいると答えた人七二%の三五七人。
持病があるが起居に差支えない二〇%九九人。
病・気・勝・五・%二六人。
病床についている三%一七人。

四、主なる病気の種類

1 高血圧	愛媛 3	徳島 2	計 5
2 糖尿病	愛媛 2	香川 1	徳島 1
	高知 1		計 5
3 動脈硬化症	愛媛 2	徳島 1	計 3
4 胃炎	香川 2	徳島 1	計 3
5 脳軟化症	愛媛 1	香川 1	計 2
6 足不自由	愛媛 2		計 2

7 神経痛

愛媛1 徳島3 高知2

計6

8 難聴(耳)

愛媛1 香川1 計2

五、健康保険に加入されている

人

勤務先で入っている人一三

〇人(二六%)

国民健康保険に二四六人(五三%)入って居られますが七二人(一四%)は健康保険に入って居られません。

六、恩給年金

四〇万円——六〇万円までの人が三四%一七一人で最も多く一〇〇万円以上の人六人一%、退職年別に受給者の一番多いところは次ぎのようになっていきます。

昭和三十年以前の退職者

二〇万円未満

昭和三十五年までの退職者

二〇万円——四〇万円まで

昭和四十年までの退職者

四〇万円——六〇万円まで

昭和四十五年までの退職者

六〇万円——八〇万円まで

なお生活費については恩給年金と答えられた方が二六〇人五

二%)、一六九人(三四%)が恩給と仕事の収入とであると答えられています。

七、職業の有無

約半数の二四八人の方は無職で、共済会、建設業等公社関係の業務に就業されている方が一〇六人(二一%)このうちの六三人は松山市に住んで居られます。残りの約三〇%の方々は農業、自由業、回答なし、の方々はですが、自由業の中で司法書士、不動産仲買人等、国家試験に合格されて、その道に入り堂々と活躍されて居られる方が数名居られます。

連合会強化に

についての私見

高知 小島 諫

電友会四国連合会の強化については、泉会長の御尽力により、近く具体化されるものと期待しているが、われわれはこの問題について二回の幹事会を持った。連合会

としての案がまだ決定されていない時点で、この問題を具体的に云々することは時期尚早であり、幹事会に出された意見にふれることは避けるべきであるが、何が故に強化されなければならないかという基本的な問題を考えておくことは、あながち無駄なこととも考えられない。

退職者の会は、公務員のそれを筆頭に、国鉄、日教組、全通と、その他あらゆる企業関係の会がある。それらの会の中には、最近に誕生した全通労組のバックアップのもと、組合員で退職したものを組織し、労働組合的な行き方を目指していると考えられる異色の団体もあるが、大抵は親睦団体の域を一步も出ていないというのが現状である。が、果してこのままの姿でよいのか、と云えば、われわれはそこに多くの意見を持たざるを得ないのである。

世の中が大平無事で、インフレもなければ生活苦もない。社会の進展はゆるやかな線を画いてくれる時代であれば、一旦円満に退職したわれわれには、主張めいたことを云う必要は全然ないと云ってよい。社会の片隅で静かに世の流れを見、必要最少限度の生活にあらまんでいればよい訳である。こ

の場合は、その心の據りどころ、寂寥のはけ口としての役割を果たしてくれる親睦団体があってくれればそれでよいのである。われわれの会もこの機能だけはかなりの程度かなえてくれているものと確信する。

ところが、現実社会はそうそう甘くないのである。退職時、どうやら食って行けると思っていた年金は、止まるところを知らないインフレによって、年々歳々その実質価値を低減させられる。食えない。働かなければと思う。ところが今も昔も同じこと、トウのたった老人に、働き口が転がっている訳がないのである。その行きつくところが、老人の愚痴、と凡そ相場がきまっているのである。

現在、老人問題はかなりの社会問題である。が、その主体はわれわれ年金生活者ではない。年金で食っている者は最上に恵まれているかの如く考えているのが社会一般の常識である。云わば、老人問題の中でも問題にされていない谷間の中にあるのがわれわれであると考えてよい。自力による主張、これこそわれわれのたった一つの救いをつくるものと考えねばならない。

愚痴はみじめである。いたずら

に内攻するのみで、そこには一つの救いも生れない。現実を現実のままに認識し、そこからは出る工作を、自分自らの手で建設すること、それこそ生きている人間のやることでなければならぬ。そこで、それではどうすればよいのか、ということになるのであるが、社会が民主主義の形態をとる限り、手段はただ一つ、主張することしかないのである。主張といっても真に他愛ないと云おうか、われわれ自身で考えておる不満を率直に述べれば事足りる。『退職時と同等の価値のある額にしてみたらいい』と云うことである。素朴、当然、至極無理のない主張である。云うより外ないのである。が、ここで敢て少々の理屈をこねるとすれば、現在のインフレは終戦直後のインフレとは性格が違う。云わば政治がこしらえたインフレである。生産性拡大政策強行のために発生したインフレである。この作ったインフレの最大犠牲者であるわれわれを、政治は放任してよいのか。政治のつくった犠牲は、政治が是正すべきではないか。この程度のことは云わしてもらってもそうそう過激でもなんでもないと考ええる。

ところが、現在のバラバラの親

睦団体では、そうした発言は出来るとしても、それをカバーする力はない。素朴且当然の主張も、生かされなければ無に等しい。この主張をみのらす為にこそ、組織が必要であり団結が要請されるのである。

われわれが連合会を強化したいと思うのはこうした理念に出發する。当然四国の強化は全国単一組織に、更に同じ境遇にある全国もろもろの組織とのていけいへと発展すべきものと考ええる。

以上述べたことは、あくまでも基礎である。この体形が出来て、はじめて効果的な戦術が討議せられ、その進むべき軌道も生れて来ようというものである。退職者の会には団体交渉権もスト権もない。云わば特殊な存在として、どんな具体的戦術を編み出すべきか。これからあたりから本番ということになるわけであるが、その本番はるか彼方にかすんでいるというのが現状であろう。道遠し、しんどい話と思つてはならない。あらゆる道は遠いのである。ローマは一日にして成らずである。



ヨーロッパを

旅して

猪谷嘉夫

はじめに 最近レジャー旅行が盛んになり国内は固よりのこと猫も杓子も海外旅行に出かける有様だが、私の猫か杓子の類かも知れないが、実のことをいえば私は退職当時から冥途に行く前に一度はヨーロッパ旅行をしたいと念願していた、然しいざ決行となると一抹の不安が起きてのびのびになり、

一昨年は万国博が開かれこれにも行きたいし、また本年は冬の札幌オリンピック、秋のミュンヘン（ドイツ）オリンピックがあつて国際線も混むだろうし、それに年一年と老化して身体に自信がもてなくなることもあつて、四十六年中には是非実行したいと内々準備をしていたとき、偶々奈良女子大（旧女高師）の同窓会がヨーロッパ旅行の参加者を募集しており、会員でなくとも参加できるとのことを知人から教えられ、早速案内書を取寄せて見ると日程もゆっくりしており、西欧の主要都市は勿論の

ことその他是非行きたいと思う所もスケジュールに入っており万事好都合と早速申込むことにした。他に二―三の大学の同窓会と共催の様であつたが実際は大阪日通の海外部が計画しておるものであつた。

こんなわけで二十四日間のヨーロッパ旅行をしたが、電友会員の中でも是非行きたいが何となく不安めいたものがつきまとい決行しかねている方もいるのではないかと思われるので、私の経験を披露することにした。

1 手続 何はともあれ旅券（パスポート）の申請、大体出発の四〇―五〇日前に必要がある。申請してから早ければ十五日目に遅くとも二十日目には許可が降る。申請書は旅行社の者が記入してくれるから認印と三千円の手数料をもって県庁へ行けばよい、旅券が下付されれば旅行社に送り入国査証（ビザ）を作ってもらふ、入国別に一定の書式に従いタイプしたものを旅券と共に携行する。

予防接種証明書も絶対的のもの、予防注射は天然痘だけでもよいが南方廻り（インド、東南アジア経由）のコースをとるときはコレラもしておいた方がよい。私はコレラはしなかったが、マニラでコレ

ラが発生したとかで入国の時、羽田の検疫所で一寸ゴタついたが、注意書を渡されて無事入国したが、こんなこともあるからコレラもしておいたらい。なお予防接種証明書には検疫所の検印（俗に桜マークと称しておる）を受けておかないと役にたたない。

次は旅行保険のことだが強制的なものではないが安心料を払うつもりと、外国では診療費が非常に高く、薬も医師の処方箋がないと買えないのである。私はアメリカの国際的保険会社に二十四日間の旅行で保険料九千円保険金一万五千ドルに加入した。こうしておけば万一航空機事故でコロッと行けば保険金五四〇万、それに航空会社から最低五〇〇万はくれるのでザッと見て一千万円以上になるので周囲の者に迷惑をかけることはないと考えて加入しておいた。

2 携行品・服装など 携行品は軽くて量ばらないことで準備すること。気候は日本（東京）と余り異なる。私が行ったのは三月十八日から四月十日で彼岸過ぎの気候だが北欧でホンの心持ち寒い位であった。緯度からすればロンドンが北樺太に当り、花のパリが札幌と同じだが、北海暖流の関係で北日本より余程暖い。服装は冬

仕度としオーバーはスプリングを、別に毛糸のチョッキを予備に、雨の降り易い時期なので雨具として登山用のビニール製アノラック―折り畳めばポケットに入る―を持参した。この他肌着・ワイシャツを二・三枚宛余計に持参したが、ホテルで洗濯する努力をすれば着替は一枚宛で充分、若し洗濯するの嫌なれば捨てても惜しくない程度のもを汚れたら捨てる、使い捨て方式をとるのが賢明である。

欧米のホテルでは日本旅館の様に寝衣、スリッパは出さない、従ってパジャマ、スリッパは是非必要、それから忘れてならないのが薬品類、私はクロマイ、テラマイ、ビタミン類、胃腸薬、鎮痛剤、征露丸に少量のホータイ、サビオを携行した。それに石けん二ヶ、洗剤（ホテルで洗濯する人は）を少々、食料品はパックした日本米、乾燥味噌汁、ねりウニ（パンにつければおつまみ）、その他ビニール袋、細網（荷物を縛ったり、バッグの手がとれたときの応急用）針と糸を若干、フィルムも携行した方がよい、私はスチールと8ミリを持参したので、スチール用は二十枚撮り十本、8ミリを十五本、いづれもカラーのものを用意した。行く先で買えないことはないが、

日本製のものでも高いし売店をさがすのも容易でない、コダックならどこでもあるが帰国して現像が厄介である。できれば日本の五円硬貨が外国で珍しがられるというので―事実ヨーロッパの各国には穴のあいた硬貨はなかった―銀行に頼んで新しいピカピカの五百円両替して行き、ベルサイユやロームで小学生にやって非常に喜ばれ、またナポリで学校帰りの女子高校生に少しやっから大勢集ってきて往生したことがあった。時計は二ヶ持ち左手は日本時間、右手はそれぞれの現地時間に合せることにした。参考書は交通公社発行のヨーロッパと同じく六ヶ国語（日英米仏独西）共通の日常会話編を持って行ったが片言と手真似の方が早いので殆んど使用せず。

3 ホテル・通貨など

団体旅行はデラックスでなければ航空機、ホテル、汽車はエコノミックスクラス―日本流の二等―である。従ってホテルも二流か三流ホテルは日本の旅館に比べて非常に地味である。大体ホテルは静かに休む場所なので日本のように騒しくない、二人一室で各室にトイレ、バス又はシャワーがある。室内は広く二十畳位ある、スチーム暖房の調節がよくて暑くもなけ

れば寒くもない、寝るときも厚いシートか毛布のようなもの一枚かけて丁度よい位、ラジオもテレビもない。夕食は八時から、従って見物から帰りバス又はシャワーを浴るとき洗濯してラジエーターの付近におけば朝までには乾いておる。朝食は出発時間にもよるが、大体八時頃でその一時間前にモーニングコールとして内線電話で起してくれる。食堂へは服装を整え、男子は上衣をつけネクタイを結ぶ、然し我々のグループではノーネクタイや上衣を着けない者がかなりあったが、こんなことが日本人旅行者のエチケットを批難されることではないかと思う。夕食はパンにスープを含めて二―三皿、デザートとしてアイスクリームか果物にコーヒーで簡単、飯物は水以外は個人負担でそれに一〇―一五%のチップがつきもの、ビール、ワイン、ウイスキー、ジュース、コカコーラ、レモン水等、朝はパンにコーヒーか紅茶、コーヒーはお代りをもらうこともできる。水道の生水を飲むと下痢することがある、ミネラルの構成がちがうようだが、俗に水が合わぬとはこのことである、ホテルでは二リットル瓶に飲料水を詰めたものを旅行用として売っておる。

通貨 ドルと円を少々持って行つたがドルなら何処でも通用する。円も日本人客の多い店では通用する。入国したらその国の通貨に両替する、空港の到着ホームには銀行があり大きな空港なら夜間でも両替できる。ホテルで両替してくれる所もあるが、相場変動のサバを読まれているのか両替料が高い。買物の予定がなければ両替は少な目にするかドルを払って釣銭をもらう方法もある。チップの關係で少しはその国の通貨がいる、銀行での両替は紙幣に限り硬貨はしてくれない。イギリスが一番複雑で従来一磅一〇シリング、一シリング二ペンスが、私が行く前の二月一日から一磅一〇ペンスと単純になったがその当時新旧硬貨がいり混り、新貨にはNEWと刻印されておるが換算に頭を痛めた。

言語 団体で行けば添乗員が付添うので余り心配することはない。できれば数の数え方の英語は知っておく方がよい、私はおぼつかずから英語とドイツ語をホンの少々知って居るがその他は全然駄目、でもパリーのホテルの近くにデパートがあり二、三回買物に行つたが、手真似と数字は英語で結構色々な買物をする事ができた。イ

タリーでは釣銭をごまかされると聞いていたので買物には大分注意した、人が悪いようだが先づ正札を見ておいて若干不足目に払えば、怒った様な言葉つきで不足分を催促する、このときは心理的に余りごまかしが言えないものである。

4 ショッピング

観光旅行の楽しみの半分は土産物買いにある。日本の観光地では土産物店が軒を連ねているがそんな風景は全然ない、また菓子類や土産物専用品もない、その他の一般商品である、スイスの時計、イギリスのウイスキー、フランスの香水などは主要空港の売店なら大概売っておる。日本人は土産物マニアの為か北圏コースの最終空港アンカレッジ、南コースのアテナ、ローマでは何でも買えるが品種が限られて少々割高の様である。空港の出発ホームの売店では無税扱のコーナーがあるし、パリでも旅券を見せれば無税扱いしてくれる店がある。ジュネーブのオメガ・ローレックス時計総販売店、パリーの日本人を主とする店には日本婦人が応対しておるから言葉の点では心配はない。イタリーの革製品はフイレンツェが安いようだが、カメオ(貝彫刻品)はナポリに工場があつて小売もしてくれる。

モンブラン万年筆はフランクフルト(ドイツ)で買えばよい。

買物で注意することは日本製品をかうて帰えないことと、旅行社から各国の通貨換算用の小冊子を与えるから入国した国の通貨と円の比率を頭にいれて品物の相場を判断するように心がけることが肝心、昨年の八月から暮までつづいた国際通貨の混乱は旅行者にとって大きな難事である。

5 コース

三月十八日の夜十時半に羽田をたつ予定が遅れて一時半出発アンカレッジに向う、最初はエール・フランスだったが、同社がストの為オランダ航空になった。高度一万米時速八五〇千米で雲海を下にぬける様な青空の中を東北に震動もなく結構手紙もかける、聞えるものはジェット音のみ、程なくして夜食が出る、機内の食事は実によく特にオランダ航空のものは定評がある。窓外には月が美しく輝いている、食事をしている間に月は機の下方向にかなり北上したことになる。そのうち行手が白みかけ淡紫から紅になって陽光、七時間位でアンカレッジ着、前日の午後二時、空港ビル内は汗が出る程、頼んで屋外に出たら零下一〇度、雪に覆われ寒々とした景色、

一時間後に出発、一面白色の北アラスカ、カナダの北極海諸島上空まではよく見えたがそのうちに薄暗くなり夜、東行の場合は航速八五〇千米に太陽の自転速度一、六〇〇千米をプラスするので太陽が小走りに過ぎ去るようで時の経過が実に速い、夜中北極通過証という印刷物をくれる、これだけでは面白くないと思い偶々サービスに來た愛嬌のよい機長に片言の英語で北極(実際はグリーンランド北部の北緯八〇度のところ)の時刻とサインを頼んだら、通過後に態々來て注文通り書いてくれた。翌朝九時にオランダのアムステルダムに着陸、乗替の為暫く空港ビル内をぶらつく、十一時に南米ヴェネズエラ行に乗る、ハイジャックの出そうなコースとて入口で所持品、身体を厳重に検査される。一時間余りパリーのオルリー空港に着く、やっと念願のヨーロッパに來た感じ、直にフランに両替、到着手荷物をチェックしてバスで市内のオペラ座近くにある三流ホテルへ、チェックに出した手荷物は航空機、汽車、バスを問はず人と共に動いておるからホテルについて三〇分もすれば自分の部屋にきておる。パリーの街は静かできれいだ、建物は古色豊かな石造化粧タイ

ル張りて高さも五層できれいに揃っており、各層又は屋根との界には人物・花鳥の大きな塑像が飾られマロニエの並木は果てしなく続く、広大な広場があちこちにあって、芸術の都にふさわしく花のパリーと言われるのも過言ではない。夕方四時頃ともなれば大通りの商店街では歩道にテーブルを出して沢山のパリジャンがコーヒー、菓子等を楽しんでいる。翌日はパースでルーブル博物館、ノットルダム寺院、コンコルド広場、昼食は日本料理店で日本食、モンマルトの丘、エッフェル塔、ナポレオンの眠る霊廟等を見て買物をする。パリ、ロンドン、ローマにはスリが多いとのこと、特にパリでは裸体婦人写真を思わせぶりに見せて売付けのものが多くついでにスリという始末故用心が必要。

オランダ 三月二十一日の早朝パリーの北駅から汽車でアムステルダムへ、市内見物、名物の風車も今は観光用に残っておる。日本の風車は水を得る為だがオランダのは捨る為のもの畑地は水面下にある。世界的に有名なダイヤモンドのカット、研磨工場を見る、三十四、五の日本人マネージャーが応待してくれた。アムステルダムのホテルの食事は美味―野菜は実によい―ビールも世界で一二のハイネツケンこくがあってうまくいった。翌日からバス二台―六〇人乗りに三〇数人乗ってロスチャイルド城(別荘)を見て独逸国境へ

ドイツ 国境で簡単なチェックインして一路アウトバーン(ヒットラーが二次大戦前に有事のときは滑走路にするつもりで建設したもの、六車線で分離帯は一米位の幅、右側通行で右端が緩速で停車してもよいが左の二線は高速線)を南下する、人・車の横断もなければ交叉は立体従って交通信号もない。北部の森林地帯では鹿の横断注意の表示が出ておる、都市を過ぎれば人家は点在し、ドライブインもなく、スタンドのある所にレストランがある程度、農地はゴルフリンクスの様に青々とした芝生で何も作っていないようだ。夕方デュッセルドルフドイツ第一の工業都市然し尼崎や川崎のようなゴミゴミさはない、日本の商社の営業所も多く日本人小学校もある、ゾリンゲンの刃物で有名、土地柄ホテルはお粗末であった。翌二十三日は、同じバスでライン川に沿って主都ボンを通りコンプレッツ通りから兩岸の山裾に古城が見える、ローレライまでに四〇位

あってラインの眺めが最もよい所、ローレライは言う程のことではなく日本でのみ有名、夕方ドイツ第一の都市で欧州金融経済の中心地であるフランクフルトに着く、ゲートの生家を見て繁華街を歩いてモンブラン万年筆などを買う、更に南下してハイデルベルグで泊る。ドイツ最古のハイデルベルグ大学があり文教都市にふさわしく静かできいな街、翌朝、丘の上にある巨大な古城を見て一路北西に向いてスイスへ

ジュネーブ 夕方主都のベルンを通ってジュネーブに着く、レマン湖を中心にして湖畔から山手にかけて市街がある、色々の国際会議が開かれる所。翌日市内見物、ILO本部、旧国際連盟―現在は国連欧州支部、赤十字本部などを見て、午後は自由行動、時計を求めにローレライ本店へ行ったが高級品で手が出ない、隣のオメガ本店に行く、ジュネーブ見物の代りにアルプス山麓へ行くこともできたが割愛した。

パリ―ベルサイユ宮殿 三月二十六日朝早くジュネーブを発ち再びパリへ国際列車で行く、この駅でも日本と異なり駅売は居らず、駅員のスピーカーの声もなく定刻に発車、昼過ぎパリ―南駅着、自由行動なのでセーヌ川付近を歩いてゆっくり見物する。

翌日はパリ―郊外二〇軒位の所にあるベルサイユ宮殿を見る、規模雄大で美しくフランス革命のとき襲撃せられ、その後荒れるにまかせており、一次欧州大戦の休戦条約の調印もこの荒れはてた宮殿で行なわれた。二〇年前に復興することになり専門家の努力で今日の姿にまで復元されたとのことだが、それにしても立派なもので、これだけのものを造る為に人民を搾取したとすれば革命の起るのも故あるかなと思われた。午後はパリーの新中央卸売市場を通りオリ空港からロンドンへ。

ロンドン 朝からハイドパーク、ウェストミンスター寺院、国会議事堂等を廻る名物の霧もなく上天気、十一時過ぎにバックingham宮殿につく、有名な衛兵の交替を見る、日曜と好天気で大変の出入、人波をかきわけ乍ら門扉まで行き一時間余り汗ダクで写真をとる、保守王国の典型的な行事、一個小隊位の特別の服装をつけ軍旗を前にして軍楽隊を先頭に宮殿の近くから行進して宮殿内へ、各部置毎に二人づつ交替一時間余りして一番になった衛兵を元の形で連れ帰る、昼食は中華料理、午後はロン

ドン塔、タワーブリッジを見て夜はピカデリーサーカスのレストランドでパーティ、翌二十九日は郊外のウインザー宮殿を見る、畑地も広場も青々とした芝生、ついでハプトン王宮を見てヒースロー空港からスペインの主都マドリッドに飛ぶ、ピレネー山脈を越えた途端今までの青々とした田園が赤茶けた山肌に一変する。二時間でマドリッドに着く。

マドリッド フラメンコと闘牛の街、闘牛はオフシーズン、王宮、美術館、広大な公園を廻る、街は一時頃から四時頃まで開店休業一般の活動は休止、夕方銀座通りのホセ・アントニオ通りをぶらついてホテルへ。

ニース・モナコ 三十一日朝、マドリッドからバルセロナに飛び、乗替えてニースに向う、この辺りは海岸が美しくコート・ダジュール(紺碧海岸)と称されておる。

ヨーロッパの避暑地で前は海、後は山で中腹まで高荘な建物がギッシリ建て混んでおるが、街もきれいで近くに国際映画祭——映画の国際見本市——が行われるカンヌがある街を一巡りしてホテルへ。

モナコへは船で行った、東西二軒南北一軒余の小王国、山の上に王宮——アメリカの女優グレース

ケリーが王妃——を見てカジノ(国営賭博場)でルーレットを見る、立派な建物の広間に三基のルーレットがある、日本の丁半に若干相通ずるものがある。ここからバスで仏伊国境でチェックインして花で美しいリビエラ・コースト(花の海岸)を通過してコロンプスが出航したゼノアで泊る。

イタリアーゼノアを四月二日にたちピサに向う、ピサの斜塔に上る、ピサの斜塔は工事中に地盤の関係で傾いたがその仮統工して上部は真直ぐに建てられておる、太陽道路を南下する、そら豆の花が咲いていて日本に似たところがある。フィレンツェに着く、古い街でイタリア・ルネッサンスの発祥地、ミケランジェロや著名な文芸家も住んでいたとのこと、大きな寺院や王宮がある、ここで泊り、翌日市内を見物して午後ローマに向う。

ローマ テルミニ駅(映画終着駅で有名)の近くに泊る、翌日はサンピエトロ寺院(バチカン)、スペイン広場、トレビの泉、昼食は日本料理店で和食、米飯は上等のミラノ米のことだがサバサバして粘りけがなく外米のようで我々には向かない、古代ローマ、大浴場跡、コロッセ、ベネチャ宮殿

を見て、夜はレストランでイタリア音楽をきき乍らパーティ、翌五日はナポリ——港街で海岸通りはパツとしないが山手はきれいだ、つづいて近くにあるポンペイの廃墟を見に行く、ベスビヤ火山の噴火で紀元七九九年に全市が埋没したのを二百年余前に発掘されたものだが二千年近く前の街としては驚くべきもの、ナポリで泊り夜の街を歩く、果物が安くネーブルなどは美味、翌日市内を自由に歩いて午後汽車——この時は一等車で——ローマに帰る、翌日は最後の滞在で自由行動なので地図を片手に今一度重なる遺跡なり前々日行かなかった所へ足を棒にして歩き最後にサンピエトロ寺院に行き三百リラ払ってドームの頂上に上る、天気もよく直下のバチカン法王廳、ローマ全市を見渡す眺め、若干の土産物を買う夜はホテルで帰国準備、八日朝ローマからギリシャのアテネに飛ぶ。

アテネ 円形の湾の周囲に市街がある、オリンピックスタジアム、王宮を経てアクロポリス神殿跡を見て夜、アテネの街の看板はギリシャ文字(象形文字)なので全然判らない時折英訳がついておる、ここの料理は一風変わっており、妙な香いが鼻について余り欲しくな

かった、午後九時にアテネ空港、煙草とウイスキーを買い十一時にオランダ航空の南廻りで帰途につく。

夜半中近東のベールト、早朝アラブのクエートに寄港、妙な照明と思ったら天然ガスに点火したものが沙漠の中を点々と燃えておるのである、昼頃西パキスタンのカラチ着、空港ビルに行ったが三十二度の高温でボーッとすると、撮影禁止、次はインドのニューデリー、暑いので降りない、病人が出て印度人医師が来る、ニューデリーからバンコック、大儀なので降りない、最後はマニラ、空港ビルに行く高温多湿で汗がにじみ出る、午前三時頃出発羽田に七時に着く、税関の検査、検疫をうけてホッとする、全日空で伊丹、汽車で桜が散りかけた高松へ三時頃着く、左程疲れもせず近県へ二、三日旅行した程度、唯二夜ほど眠っていないので少々眠かった。我ながら案外タフなものと思った。

(一・一三 記)



随 想

山頭火雑記

松山 高橋林二郎

さを味ふ。
と誌している。

私が藤岡さんのお宅で、はじめて山頭火にお眼にかかったのは、その翌日か、翌々日のいずれかであった。この日、山頭火は藤岡さんの差出すコップ酒を楽しみながら、あれこれと旅の思い出を語られた。

ぬいてもく

草の執着をぬく

山頭火

いま、私が所蔵しているこの筆蹟は、藤岡さんから戴いたのであるが、これは、山頭火が当時藤岡さんのお宅で認めたものの一つであらう。余談になるが、さきごろ一番町の郷土芸術館で「山頭火遺墨展」が開催されたが、展示された遺墨のなかには、この句が見当らなかった。山頭火は他の場所では、この句を揮毫しなかったのであらうか。それはそれとして、昨今の山頭火ブームには眼を瞠らせるものがある。

十二月十五日、高橋一洵さんの骨折りて山頭火は、城北御幸寺門外の「一草庵」に落ちついた。一草庵というのは、大山澄太さんの命名であった。さっそく、山頭火を囲んで、一洵、政一、汀火骨、

無水、和雷らによって句会が催された。会は、「柿の会」と呼ばれ

ることになった。年が明けて、一月四日付で私は広島通信局へ転勤になった。

さて、山頭火の一草庵での生活は、時には酒に溺れることもあったが、まずまず、といったところではなかったか。隣家に、寒いにつけ、暑いにつけ山頭火に気をつかってくれる老婦人がいた。映画監督の伊藤大輔の母堂であった。

十月六日、七日は松山地方の秋祭であった。そして、十日は護国神社の大祭である。このところ、山頭火は連日俳友たちから酒をよばれ、上気嫌であった。が、山頭火にとって、これが最後の饗宴となった。

山頭火法師追悼

種田山頭火法師十月十一日未明

松山一草庵において脳溢血にて大往生いたしましたつしんでお通知申上ます。

松山市御幸寺一草庵

柿の会

月とおれをおいて

いつてしまった 緑 平

さきの世まであるくか

清 衛

読んでいただく日記しみて

お火がゆらぐ

一 洵

藤岡さんから「山頭火逝く」の報らせがあった日、大山さんは通

信局におられなかった。例年、この時期には大本山仏通寺で、職員を対象とする修養会が組まれ、大山さんはこれを主宰する福利係長の立場にあった。また私も、この行事に参加する工務の訓練生を引率して、一兩日中に出発する予定であった。

十月も半ばを過ぎて、仏通寺の山内は、掃いても、掃いても降りしきる落葉であった。日中の作務を終えた訓練生は、それぞれの宿坊に引きあげて、広い境内には人影はなかった。この朝、松山を発った山頭火の遺骨は、息子の健さんと藤岡さんに守られて、高浜、宇品を経て、ほどなく仏通寺へ着く時刻であった。私は大山さんに随って、山門前で一行を待った。

「杉本さんも、山頭火もええときに死ねたのう。時局はいよいよむづかしゅうなるばかりじゃ」

日華事変の緒戦に散った杉本中佐は、大山さんの心友であった。気性のほげしかった人で、生きておれば、戦局に対する憤懣もあらう。また、山頭火の場合は、きびしい世相が、職を持たない彼をいつまでも温かく迎えてくれるかどうか。

「先刻、雲水に一走り本郷まで下ってもらった。今夜は山頭火

と一緒に飲もう、あんたも手が空いたら穩寮まで出向いて来んか」

その夜、管長さまのお部屋で、読経のあと、藤岡さんから詳細な報告があった。やがてお茶が出る

と、益州老師が

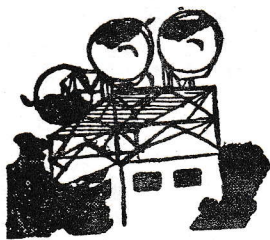
「高橋さんも一つどうや、京都から届いた虎屋の饅頭じゃ」

とすすめて下さった。頂戴しながら「良いお月夜で」と申しあげると「そうや、ほんまにおとなしいお月さんや」といわれた。老師さまは明治十五年のお生れで、山頭火とはおない年であった。

翌朝、山頭火の遺骨は、ふたたび健さんに抱かれて、サキノ夫人の待つ熊本へと旅立っていった。

ほろ／＼ほろびゆく

わたしの秋 山頭火



祖 谷

徳島 豊崎二三男

一般に祖谷と呼ばれているが西祖谷山村と東祖谷山村の総称である。日本三大秘境の一つと言われ

ずい分と神秘に包まれているように見られている。昭和初めの地理の参考書では「この秘境の人々は年に数回その山でとれた獲物などを持って阿波池田町へ出て物々交換をして必需品を求めて山へ帰る」と書いてあった。私はその当時、大阪通信講習所高等科に在学中で地理の時間に先生の講義がこのように言われたので、そんなことはありません今は祖谷へ通ずる道路も車が通れる広さがあります、先生の参考書を書きかえて下さいと皆の前で一席弁じたので先生から

「祖谷からお出の方がありません」とは知りませんでした、いや！どうも大いに参考になりました」と訂正があり、同級生からはそれ以後私が祖谷の出身ということになって仕舞った。

祖谷は平家の落武者がここに

くれて住付き永く一般社会とはなれて昔ながらの風習を守り続けていると伝えられるものである。今も少しはその名残はありますが、電源開発により発電所も数ヶ所でき電力に不自由がないのでテレビの普及率が高い、その上地域団体加入電話によって殆ど家々に電話をつけたので随分と生活は近代化されている。

祖谷へ平家はどのようにして落付いたのであろうか？いろいろ説があるが現在の阿波池田町から祖谷川に沿った県道は大正のはじめに完成したように聞いているが、それ以前は溪谷の兩岸にそそり立つ絶壁をみる時、到底往来はなかつたものと考えられる。屋島の戦で破れた平家は、さぬき山脈を越えて阿波へ入り吉野川をさかのぼ

って貞光から一字村を経て剣山を越えて祖谷へ、穴吹より木屋平村を経て剣山へ到る。又、辻町から井内谷を経て祖谷へ、大歩危より山越して祖谷一字に到るものなどがある。なお剣山を越えて南方へ下り木頭を経て海部郡の大平洋沿岸へ通ずる途もあるのが屋島から船で逃れこの方面から剣山へ登ったとも考えられる。このことは現に平家の象徴として語り伝えられている平家の赤旗を拝見すると墨

で書かれた大きな文字で八幡大菩薩となっている。平家の赤旗は現存するもの三流と聞いているが、真紅の色をしているものではなくその昔特別の糸で織られた有色のもの色があせて薄黄ばんだ今日色になったものらしい。この旗は相当權威を示すもので昔時の軍団の指揮者に許されたものか又は賜ったものであろうと言われる。一方では軍船に用い、船印としたとの説をなすものもある。それは和倭の船団が八幡大菩薩の旗をかかげ東支那海へ押し渡った史実と関連があるとした考え方によるようである。

現在の祖谷では昔の風俗習慣をしのぶため、西祖谷山村で公民館に資料展示室がある。同時に神代踊り、粉ひき唄、地つき唄などの実演がある。全国で唯一のかずら橋は祖谷溪の景勝と共に有名である。祖谷の名物はその地に行つてほんとうの味があるようである。祖谷は美人が多い平家と共に落ちた京美人の流れを汲むものだと言われる。徳島では所々に祖谷そばののれんが見える。池田駅のプラットホームにも売店があつて旅行者から好評を得ているようであるが、祖谷そばの自家はやはり現地である。手打ちのそば切りをき

の鳥のだしていただくのが最上である。その他祖谷の山菜料理は山の香りをそのままに伝えている春さきから、うど、木の芽のでんかく、あめご料理、祖谷川の清流はあめごの産地でもある。こんなにやくのさしみ、こんなにやくはその形と質の良さは忘れられないもの一つであろう。

湯山慕情記

松山 二神武弘

……AFC電友のつどい……

○ 相寄る心

松山局のSさんらの発案が打てば響くように実を結んで、かつてのAFC（連合軍通話）関係者の親睦の集りが、明けて間もない一月十五日に、初回の講習会場として想い出なつかしい湯山の、ゆくりなくも旧通信寮に隣接するえびめ荘の一室で開かれた。

ささやかな会合ではあったが、

心なごむ懇談の雰囲気は参会者の胸に、季節に先だつ春の息吹きをもたらし、とても愉快な場を展開した。

○ 回顧

敗戦直後の昭和二十一年五月といえ、戦災焼土の松山市街は見渡すかぎり赤茶けた瓦礫の沙漠で、通信局も電話局も市の内外の古寺や民間施設に借家住いをして居った不便極まる窮状であった。

GHQの指令により、あらめる悪条件のもとで、AFC要員を火急に養成する講習会場は、松山から遠く離れて交通不便な、湯山通信寮の時雨館を使用するほかに場所がなかった。

霊場石手寺から清流のせせらぎに沿うた昔ながらの旧街道には、一日数回、古い小型バスが不定期のように無愛想に通って居ただけで、松山方面との往来は大低は徒歩であった。

時あたかも史上最悪の食糧難時代とあって、飢えた足で歩いた湯山への道はしみじみ遠かった。

空腹の疲れ佗しく憩いけり
清水ささやく岸にかがみて

管内各県から集った受講者には、飯米持参の三週間の泊り込みの講習が、仏門の参籠さながらの味気ない起き臥して、若い女の子とし

ては、いささかノイローゼ気味に陥ったのも無理ないことであつた。

続いた第二回と第三回の講習は、会場を香川県善通寺に移して旧兵舎を教室に使ったが、いずこも同じ敗戦虚脱の混乱裡で進めた筈話養成の慌しさには変りなかった。選出された職場に対するひたむきな責任感と戦中育ちの耐乏力だけが、彼女らを支えた気概だったと思われる。

こんな折羽詰った極限の環境にあつて結ばれた共通の職場意識は、たとえ束の間の出会いであつたとは云え、人の心の奥深く浸透する友愛の情を育くみ、生涯忘れられない追慕をそそのものである。

爾来星霜去来して四半世紀、彼女らをせかせかせたAFC業務は、浮んで消えたうたかたのように、管内では既に二十年前に解消し、今では部内者でも、そんな変則取扱いのあつたことさえ知らない人が多い筈である。二昔半も前の異常事態であつた。

当時は、たち前後だった未婚の乙女達も今は四十代の中年婦人で、その子女が学校を卒えて就職、結婚と、将に世代が交替しようとする家庭の中心に立ち、自己の人生走路の後半に踏み入ってみると、

若かりし日の飢えた講習の起き臥しも、続いた日常職場の単調な繰り返えしも、二十余年の歳月で濾過されては、過去の一さいがバラ色をおびて迫って来る郷愁に浸るのも、蓋し人間心情の自然な流転の姿であろう。

○ 親睦

暖冬とはいえ、矢張り一月半ばの山峡の天気は肌を冷めたかった。県境を越えて馳せ参じた一人びとの胸には、通り一ぺんの義理人情とか、うわついた好奇心などとは全然異質な、何か或る共通した情緒が日頃から潜在して居って、それが彼女らをはるばる冬の湯山へと赴かせたのであつた、と思われる。

殊に現役で勤めを持つ人にとつては十五、十六の連休日は、長らく爪立ちして待った嬉しい自由のプランもあつた筈だ。そこをいち早く汲みとった幹事役のこまやかな心づかいが働いていて、遠来の友を迎えるにふさわしく、万事そつなく整えて、なごやかな雰囲気をかもし出して呉れたのも、知人ぞ知る友心のゆかしさであつた。記念撮影、親睦の会食、想い出話の交換と、心おきない談笑のうちには時の移るのも忘をがちになつた。

前後三回の養成で百人に垂々とした同僚姉妹だったから、その個人消息の追憶談に入っては、二十五年余の空白の壁は厚く、変化の多い女性の前半生の歩みの跡はなかなか、ほぐし切れないケースが多かった。

語り合うほどに、思い出すほどに、お互いの交渉の網の目は次第に、おぼろげに、遠い昔のあれこれの舞台が連鎖して、みんな若返った。

共通の体験を持つグループの懇談では、語り手も聴き手も異身同心の一体感に包まれて、興味は津々として尽きる所がない。想い出は現実よりも美しく、楽しいものである。

語り合うていと、昔のままに幼な顔に見える彼女らは、恵まれた心身の健康と開発密度の高い職場勤めによって、たくましくして身についた気品を発散するのを覚えた。

往年の古い写真を回覧しては、講師陣や管理者のうちで他界した誰彼、早世した薄幸な同僚の追慕にふれては、人世の無常感に胸を打たれるのであった。

次第に更け行く夜のしじまに気づいて、一応初日のコースを閉じ、入浴、就床、それぞれの部屋にまどかな夢を結んだ。

○ 追 懐

老境、もうろくの悲哀か、既に忘却の線上にゆらいで居った往年の記憶が、懇談の陽気にほぐされて蘇えり、枕につけた頭の中で走馬灯のように点滅した。

前後三年ばかり在勤した松山通信局で、元来は電務畑に關係の薄かった身でありながら、命ぜらるるままに傍系から手伝ったのが切掛けとなって、AFC關係の諸君とのかりそめの接触が生じた。

局を離れて二十余年経った現在では彼女らも大部分は職場から退き、現職の人はほんの少数になったが、退職しても結婚しても、AFCグループとして結ばれた心の回線網は、今もほどこけないで、思慕の糸が引き続いているのが懐かしく不思議である。

在局中の昭和二十二、三年頃には、AFCの取扱実況の見学を兼ねて補足の巡回講習などで、各局を訪ねることがよくあったが、当時は戦災都市への出張者は宿泊食糧の確保が最大の悩みであった折柄、到る処で女性らしい援助の手を、求めずして差し伸べて呉れたり、勤務時間や宿明けを差し繰って暇をつくり、寸暇を待ち受けては、慰安や土地の案内に嬉々として奔走し、旅愁を慰めて呉れた、

あの純情可憐な乙女心の発路は只今も感謝の想い出の一つである。

接触と云っても短期講習のこととて、僅かに三十時間内外だったと思うが、飢え渴いたように求める受講者側の真剣な学習意欲と、こちらは講習量と持ち時間の制約に追われ、必死で全力投球した夢中の指導とが、期せずして霊犀相通じる焦点を結んだのであろうか。ともかくにも長い人生の旅路で、はしなくも袖の振り合った儂いえに、しではあったが、熱のこもった教室の印象は心のカメラに焼き付いて消えない。

昭和二十四年の秋に電通局を去ったあと、約十五年間、少年時代に真摯な教導に浴した老恩師の要望にこたえて、一個のサラリーマン教師として平凡な教壇生活を歩んだが、時勢のバスに乗り遅れて斜陽に立たされて居った校運の赴くところ、教師陣容も集い来る生徒も凡庸鳥合化して、気合のぬけた宗門学園の残骸であった。

九十余歳の高齢で老師が他界されるまで、慢然と退嬰卑屈な職員室に留って居ったが、精神的には苦しいものがあつた。打てば火花の散るような熱と力量を秘めた教師と、澄んだ秋空のように明るく専心な生徒とが相接してこそ、師

第一体の教化の実が結ばれるものである。彼此対照的な体験に考えさせられる所が多かった。

○ 湯山即詠

土佐路越え讃岐路越えて友つどい
春まだ遠き部屋もほのぼの

なごやかに積る想い出交はしつ
話し果てなくあたら夜は更く

くつろいではしゃぐ笑いは皆幼な顔
四半世紀のとしをなみして

東風寒き夜の讃岐路へ友ら立ち
つつが無かれと祈る佗しさ

開発という業(わざ)憎し湯山溪
呼び名は変り清水音絶ゆ

旅人よ人もし問はば湯の山は
水も木もかれ車群れぬと

時雨館まぶたに残る屋敷あと
知らぬビル建ち腹立たしかり

(一九七二年一月)



短 歌

紀の国に遊ぶ

松山 藤田基孝

早発ちして孫に逢ひにゆく汽車の
旅身体弱き妻を座席に横たふ
くれなるの芒穂なびくしきりにて
洲をめぐる水に夕日まぶしも
船室の毛布に妻と横たはる今宵は
逢はむ孫を言ひつつ
旅なれぬ妻労はりて甲板にはや秋
の色の紀伊の山指す
夕靄のなびかふ港の涙ぐまし孫の
住む町を船よりながめて
石垣の石に刻まれし紋どころ異な
る見つつ妻におくれぬ
肘壺に刻みしと伝ふ天下太平の文
字を城門の扉にさがす

尊きひとの高野詣でに履きしわら
じ古びて残るお供人数帳も
紀伊殿の生きてゐるまさは如何に思
ふコンクリートの階鉄筋の天主閣
多宝塔恋ひつつ来にし松の蔭御堂
にむつき干されてありき
西湖にもありし石橋を妻と渡りし
ばしさまよふ片男波のみち
和歌の浦の昼の魚市場ひそまりて
まぐろの頭積み上げてあり
秋日さす磯のみち遠しこの浦の雑
賀崎にも妻の手を引く
妻も吾も疲れてわびし浪早崎の松
蔭によりてしばしまどろむ
雨けふる白良の浜にゆきあひし処
女も旅の心にしみぬ
岩の間にあふるる飲みて牟婁の湯
に旅の疲れし心しづめぬ
湯の中に杞るみほとけ浄らかに痛
む吾が足癒へよと願ふ
観音のみ足のもとに湯を浴めばい
やおもはゆき心おぼゆる
牟婁の湯に伴はざりしを老妻の吾
を責めやまず宿に帰れば
いにしえのみ陰刻める岩壁も祀ら
れて今に賽する人多し
歎喜仏の前にかがみてしづかなる
和合のさまなどのぞきて帰る
明日は行かむ熊野の道を思ひつつ
茜さす山を宿に見てゐし
旅に病む妻を思へば涙出て熊野権
現に鈴振りて立つ
速玉の杜に古く伝はりし徐福の唐
鞍を吾は見づに去りき
旅の宿に妻を看取りてゐる宵を熊
野祭の太鼓きこゆる
秋日うすき熊野の川の土手の上屋
根に石おく家一つ見ゆ
目の上のみ寺は遠し巡礼道妻の手
を取りつまだちのぼる
納経を那智のみ寺に疾くすませ静
かなる滝を遠く見て立つ
長生きをせよと授かるこのみ札わ
が掌にうけて那智山を下る

孫ら住む国をめぐりて帰り来ぬ耳
遠き妻と足弱き吾と

むくのみ俳句会

三月例会

春の風邪おさえて琴の師をつとめ
退庁の紅ひき直す春隣
定年の間近し春の雪霏々と
陽子
城うらゝそのまゝ宵の灯に続く
春宵のネオンが城の灯を奪う
芽柳を映せば沼の水も春
波久
義父逝くと電話おろおる春の雪
とるに飽く土筆のはかま妻の留守
バイパスにとらるゝ家や雪の果
峰生
春灯かざして選ぶ陶の鈴
農いとう子がまた一人卒業す
孫に買う冬の苺の値を問わず
都夢

休め田の枯草燃やす頃となり
春光のリフトを揺らす観光客
一箸の土筆が話題なる茶席

瀬 湖

竹馬に乗る子等春や幼稚園
春や春なんと綺麗な裁判所

埋立ての土のかぶさる芹を摘む

よしみ

日時 三月十日午後六時から
出席者

客 後藤波久氏、月原陽子さん
会 員 大野峰生、玉川都夢、
佐久間瀬湖、山崎よしみ

眉山の四季

徳島 安瀬久青

新年

眉山の裾紫きに初日の出

春

眉山の夜桜もよし酒もよし

夏

眉山の勢い見する夏盛り

秋

眉山の形くつきりと秋空に

冬

眉山の見える座敷の年忘れ

故先山氏を憶う

徳島 太田 集

氏を知ったのは昭和の初期だったと思います。直截的で直情的な所は最後まで変わっていません。何処までも実行家で義侠的だったところも在ったようにそのため誤解されるところもあつたようでした。仕事の上でも古い話になりますが当時は徳島郵便局の電信課に勤めていられて、私は工事局の試験課でメーターをみつめていました。

電信線も大阪二回線と神戸線が重要回線で今から思うと幼稚な施設でした。然し凡てが手動的だっただけに体当り的な仕事でした。現在のオートマチックな装置からすれば隔世の感がありますが、それだけに身心を主とした情的な仕事を督促されたことは再三再四であ

りましたがその真剣な態度は今も忘れられない。そして障害が快復した時のあの嬉こびの顔、私以上でした。眼に見えない心の姿こそ尊いものはありません。そこに無限の深さがあるからでしょう。

年月は流れて終戦後の勤めも機構が改革され電々公社になってからも電話局の現場的な仕事で一諸になりましたが、それほど深い交際があつたわけではなく路上で挨拶する程度でした。一度氏の住まわっている附近を通った時に急に電友会報の氏の特異体質回想を思い出して其の後の容態を伺いたくなくなりお宅を捜したがどうしても判らず失礼してしまいました。

其の後知人を見舞に行った時、同病院に入院していることを知りお見舞いした所、非常に嬉こんで退職者達の事や温古会の会合などの事を尋ねて非常に懐かしがっていられた。其の時に私はこうした病床に仆して居られる会員に会の雰囲気等を話すことの如何に意義深いことかと感じさせられました。帰りがけに用事をお尋ねしたところ電々四国は隅から隅まで読んでいるが退職名簿が見たいと幾度も云われるので早速通信部に走り庶務課をお願いしたところ幸い一部だけあつたので翌日早速持参手渡

し所、子供のように嬉こんでいられた姿、今でも彷彿とします。鳥許がましいですが氏の心情を書き写さして貰つてお推察をお願いします。

「前略一昨日はお忙しい中を態々お見舞に預り恐縮に存じました尚且つ昨日は退職者名簿を態々入手御丁寧にお届け下さいまして誠にありがとうございます。懐しくむさぼる様に何回も何回も眺め小生も健康な皆様のお仲間に入れる様努力いたします。……」

最後にお会しました時は去年十二月二十八日でしたが其の時は言葉も無く私は涙を押えて茫然とするのみでした。今は只お冥福を祈るばかりです。合掌。

春寒に人の命の惜しまるゝ

稲 雨



共済会からのお知らせ

昭和四十七年度第二次

育英学生の募集について

電気通信共済会では昭和四十七年度第二次分として、育英学生の募集を次の要領で行なっております。

1、応募資格

イ公社、全電通、共済会に十五年以上勤続した退職者、または退職後死亡した者が扶養しまたは扶養していた子。

ロ公社、全電通、共済会に在職中死亡した者が扶養していた子。

2、育英資金の額

イ高校育英資金月額五、〇〇〇円

ロ大学育英資金

自宅通学月額一〇、〇〇〇円

自宅外通学「一五、〇〇〇円

但し短大、高専は

月額一〇、〇〇〇円

3、申込締切日

昭和四十七年五月末日

4、育英学生の決定

育英規定により選考の上、決定します。

5、応募手続

応募希望者は左記へお申しいで下さい。

お申込、お問合せ先

松山市南持田町四〇の三
電気通信共済会四国支部
(790)

(TEL 0899, 21, 9531)



編集後記

山崎生

今年のお元日もよい天気で、六十七回目の初日の出を拝むことができて、私はこの上なく嬉しく思ったものでございます。暖冬と言いい、春寒と言いはしたものの、梅は咲き、桃も桜も花を開きました。かく大自然の営みには大きな狂いはなく巡り来まして早や若葉の候となりました。鯉鱈の緋、黒そよかぜに仲よく泳いでいます。春闘もおさまり、ともかくも沖縄が間もなく本土に復帰することになりました。

汽車に乗り、飛行機を見、電報や電話を知り、ラジオを聞き、テレビを見ることの出来た私は明治以前に生きた遠い先祖の親々の想像もしなかったであろう——文化の恩恵に浴しているのでございます。「有難うございます、有難うございます」と再度感謝の言葉を父母にご先祖に大宇宙神に捧げます。

このさわやかな五月の空のように、老いを美しく過したいものでございます。ご病気の方も達者に

暮した楽しかった日のことを思い起し、苦しさ、辛さを和らげるように努めましょう。そして今生きていることを喜び、心を和ませたいものでございます。そのことが病を康らがせることにつながり、治癒の日の近づくきざしであると私は信ずるものでございます。どうぞあせらずに、やすらかな日々を送って下さるよう合掌させていただきます。

なお一方では退職後も公社在職当時以上にはりきって現在の職務に精励、業界の枢要な役職を遂行して居られる方々もございます。本号は春闘や、年度末始の繁忙のさ中をとくに本会報のために、通信局長さんからはご丁寧なお言葉を、文広課長さんからは有益な事業知識を有難く掲載させて頂きました。次号には役員の方々のお力添えを願って会員各位のその後のご消息を載せたいものと思っております。なおその他短歌や、俳句、随想等々ご投稿をお待ちしています。九月頃に発行したいものと思っています。